

## 無神論者のミサ

オノレ・ド・バルザック作

佐野 栄 一 訳

見事な生理学理論によって科学に貢献した医師であり、若年にして、ヨーロッパ中の医師が称賛する輝かしい知性の中心であるパリ学派の著名人たちと席を並べるにいたったピアンション博士は、医学研究に没頭する前、長らく外科の臨床に従事していた。彼の最初の研究を指導したのは、フランスでも最も高名な外科医の一人で、流星のごとく科学界を通り過ぎた、かのデプランであった。彼の敵たちが口にする言葉によるならば、デプランは、伝授不能な方法を、墓場まで一緒に持つて行った。あらゆる天才同様、彼には後を継ぐ者がいなかった。わが身にすべてを備え、わが身とともにすべてをあの世に持つて行ったのである。

外科医の栄光は、役者の栄光に似ている。役者が役者であるのは、生きているときだけなのだ。その優れた才能は、彼がこの世から消えるや、もう誰にもわからない。役者や外科医たち、また同様に、すばらしい演奏

によつて音楽の力を十倍にもする歌手や名演奏家たち、彼らは皆、ひとときのヒーローである。デプランを見ると、こうした儂い天才たちの運命が互いに類似していると実によく分かる。ついこの間まで著名であつたのに、いまやほとんど忘れられてしまつてゐる彼の名前、それは専門領域では残るだろう。しかし、そこを超えてではない。一人の学者の名が、科学の領域を超えて人類全体の歴史に刻まれるようになるには、これまでまったくなかつたいくつかの条件が必要なのではあるまいか？ デプランは、一人の人間をして世紀の名とし、顔とする、あの普遍的学識を有していただろうか？ デプランが持つていたものは、神のごとき一瞥なのであつた。修練によつて得られたものか、天性によるもののかはわからないが、彼には直観的に患者とその病を見通す力があつた。その直感によつて、彼には、一人一人みな違ふいかなる診断でも下すことができたし、大氣の状態と患者の體質的特性を考慮しながら、手術すべき正確なときを、時、分の単位まで正確に決めることができた。

こうして自然と共に歩むために、彼は、大氣に含まれる、あるいは大地が人間に供給する、根源的実体と人間とのあいだの絶えざる連関を研究してきたのではなかつたらうか？ というのも、人間は、それを吸収し、それを調整して、人それぞれに違ふ表現を作り出すものだからである。この演繹と類推とによる力、キュヴィエの天才たる所以がまさにそこにあるこの力によつて、彼は研究を進めたのではないだろうか？ どのような形であれ、この男は、肉体がその秘密を明かす相手となつたのである。彼は、肉体の現在の在り様がどうであるかを見て、その過去の姿も未来の姿も掌握した。しかし、彼は、ヒポクラテスやガレヌスやアリストクラテスがそうであつたように、学問全体をその一身に凝集していたろうか？ 一つの学派全体を新しい世界へと導いたのだろうか？ いや、そうではない。人間化学における永遠の観察者であつた彼に、もし、古代の魔術的学問、つまり、生命の諸原因とか、生命以前の生命とか、この世に誕生する前の準備段階から発生が予測される

ものとかといった、諸原理が混淆している知を拒むことができなかつたとすれば、それは、不幸にして、彼において、すべてが個人的なものであつたためである。彼は、利己主義ゆえに、人生において孤立していた。その利己主義のために、彼の栄光も今日では消えている。墓に載せられた彫像は、天才がさまざまな苦い経験を舐めながら探し求めた秘密を未来に向かつて語りかけるものだが、彼の墓にはそれがない。

しかし、おそらくデプランの才能は、彼の信念と固く結びついたものだった。だから結果として、死して消滅してしまう性質のものだった。彼にとっては、地球の大気は現象生成の袋のようなもので、地球を、殻の中の卵のように見ていた。彼は、卵が先か鶏が先か、それは誰にも分からないのだから、鶏も卵も認めなかつた。動物に前世があることなど信じず、人間の魂に後世があるとも信じていなかった。デプランは懐疑の中にいる人間ではなかつた。確信を述べる人間であつた。彼の純粹で率直な無神論は、多くの学者や世界で最も優れた人々の無神論に似ていた。とうてい打ち破ることのできない無神論者の無神論、宗教を信じる者にはそのような無神論者がいるなど容認することができない無神論者の無神論に似ていたのである。若い頃から人間の解剖を高度に行い続けてきた人間にとって、また、以前も今も以後も、人間のあらゆる器官を丹念に調べ、そこに、宗教理論があれば必要とする特別な魂を見つけることができなかつた人間にとって、これ以外の意見など持ちようがなかつた。人体に脳中枢があり、神経中枢があり、呼吸・循環中枢があることを見、そして脳中枢と神経中枢とがあまりに見事に相互補完しているのを見て、彼は、晩年、音を聞くには聴覚が絶対に必要というわけではなく、ものを見るのに視覚が絶対に必要というわけではなく、太陽神経叢(注)がその代わりする、という確信を抱いたが、その確信に疑義を呈しうる者はいなかつた。デプランは、人間には心が二つあると見ており、それまでも神に対してはいかなる先入見も持っていなかつたが、そのことから彼の無神論はいっそう確固なものになった。聞くところによれば、この男も、多くの素晴らしい天才たちが神の許しを得られる臨終の悔悛を

せずに死ぬように、さいごまで悔い改めることなく死んだ。

彼と敵対してその栄光を減じさせようとする嫉妬深い者たちの表現を借りるならば、といつても真逆を言っているの見る方がより適切かもしれないが、これほど偉大な男の生涯にも、卑しいところがたくさんあった。すぐれた精神の持ち主は、確固たる判断に基づいて行動するものであるが、妬み深い者や愚か者は、そうしたものをまるで持ち合わせていないために、なにがしかの表面的矛盾を見つけ出すと、すぐにそれを攻撃の武器に難を申し立て、ひとときだけしか有効ではない審判を下させる。たとえ、後になって、成功によって、これまで攻撃されてきた一連の様々な事柄が、始まりと終わりの密接な関連性を示されることによって、賞賛されるべきことに変わるとしても、前衛を歩む者に対する中傷は、いつの時代にも多少はあるものである。だから、現代でも、ナポレオンがイギリス本土にまで鷲の翼を広げようとしたとき、彼は同時代人たちから非難されたのである。なぜ一八〇四年ブローニユに上陸用舟艇を集めたのか、それがわかるようになるには一八二二年を待たなければならなかつた。(注と)

デブランにおいては、その栄光と学識とは非難の余地のないものであつたから、彼の敵たちはその変わった氣質や性格を攻撃した。実際、その頃、彼には、まったくもってイギリス人がよく言う、エキセントリック、というような性質があつた。あるときは悲劇作家クレビヨンのように素晴らしい服で着飾つたかと思うと、あるときは奇妙なほど服装に関して無関心を装つた。あるときは馬車に乗って出かけたかと思うと、あるときは徒歩だつた。ぶつきらぼうになつたり温厚になつたり、ころころ変わり、また見かけは貪欲で吝嗇そうだつたが、かつて、数日間、光栄にも自分を受け入れ、もてなしてくれた、今は亡命の身にある何人かの恩師のためには、自分の全財産を使つてもいいほどの度量があつた。彼ほど正反対の評価を生ぜしめる人はいなかつたのである。

医師たる者が策略をめぐらして得ようなどとしてはならない黒綬(注)をもらうために、宮廷でわざとポケットから時祷書を落としてみせる、といったような真似が、たとえ彼にできたとしても、確かなことは、彼は心の内ではあらゆるものを嘲笑していた、ということである。彼は人間を上からも下からも観察してみても、また最も厳かなあるいは最も卑小な生活における人間行動の中に不意に現れ出る眞実の姿を見て、人間に対して深い輕蔑を抱くに至った。

偉大な人間にあつては、様々な性質が互いに密接な関係にある。彼ら巨人の中のある者が、たとえ才気よりもむしろ才能があつたとしても、彼の才気は、世間でよく言う「彼には才気がある」とされる人物のそれよりも、はるかに奥深い。

天才はみな当然のこととして精神の視覚を持っている。いくつかの特殊能力は、この視象によるのかもしれない。花が見えれば、おのずと太陽も見えていなければならないのである。彼が命を救つたある外交官が「皇帝陛下はいかがしておられますか？」と人に尋ねるのを聞いたとき、この男は「廷臣が戻つて来たので、続いていらつしやるでしょう」と答えたが、こんな応答ができる男は単なる外科医でもなければ医師でもない。驚くほどの才気の主なのだ。であるなら、デプランの並はずれた矜恃を、人間を忍耐強く執拗に観察してきた者なら、当然のこととして認めよう。そして、彼自身そう考えているように、彼は外科医として偉大になつたと同様に、大臣になつても偉大になつたと考えられるだろう。

デプランの生涯を眺めれば、何人かの同時代人の目には、様々な謎が浮かび上がってくる。その中から、われわれはとりわけ興味深い謎を取り上げることにした。というのも、物語の結末で、その謎を解く言葉が見出され、それによつて彼には、いくつもの馬鹿げた非難に対する反駁が与えられることになると思われるからである。

デプランが病院で受け持った医学生の中で、最も熱心に目をかけた学生の一人がオラース・ピアンションであった。

オラース・ピアンションは、パリ市立病院のインターンになる前、ヴォケー館の名で知られるカルチェ・ラタンのみすばらしい下宿館に居住する医学部生だった。この貧しい青年は、そこで、人の心を焼くような貧困が何を招来させるか直に感得した。貧困とは坩堝のようなものである。偉大な才能を持つ者は、ダイヤモンドがあらゆる衝撃を受けてもそれに耐えて碎かれないように、腐敗することなく澄んだ心のままそこから出てこなくてはならない。彼らは、荒れ狂う情熱の激しい炎で焼かれることによって、もっとも変質せざる誠実さを獲得し、日々変わらぬ仕事をおして、天才を待ちうけている様々な困難と戦う習慣を身につけ、また、その仕事の中で、自らの誤った欲望に箍くわをはめてゆくものである。オラースは、心のまっすぐな、こと名譽が問題となるときには、言い逃れなどできない、事実じじつに單刀直入に向かう青年であった。また、いつでも友だちのためなら外套を質に入れることもできるし、彼らのために時間を割くことも徹夜することもできる青年だった。要するに、オラースは、自分たちが与えるものの代わりに彼から何を得ることができか、などといったことを心配することのない友であり、まちがいでなく自分たちが与える以上のものを受け取ることができるといふことだ。彼の友人のほとんどは、その姿に自然な徳を感じて、心の中で彼を尊敬していた。また何人かは、自分の行動が彼にどう映るか、恐れを抱いていた。しかし、オラースは、こうした長所を見せるときも、偉そうに學者ぶることはなかった。ピューリタンでもなければ説教好きでもない彼は、友に忠告する一方で、平気で神を冒瀆したし、そんなことからきっかけが生まれれば、喜んで楽しいご馳走を頂戴した。

よき友であり、上品ぶったとしても胸甲騎兵以上ではなく、素直で率直で、水夫のようではなく、と言うのも今日の水夫は狡猾な外交官さながらだからだが、彼は、まるでその生活には隠し立てするようなことが何も

ない誠実そのものの青年のように、背筋を伸ばして諸事陽気な考えで人生を歩んでいた。要するに、すべてを一言で表現するならば、今日借金取りが古代ギリシャの復讐の神の最も現実的な表象だとすれば、何人ものオレステスのような人間にとってのピュラデスのような男（注4）だったのである。

彼は貧乏していたが陽気であった。その陽気さはおそらく、精神的活力というものの最も大きな要素の一つだろう。何も持たない人間がみなそうであるように、彼には、ほとんど負債というものがなかった。ラクダのようにわずかしら飲み食いせず、鹿のように敏捷だが、思想と節操は堅固であった。

ピアンシヨンの幸福な人生は、かの有名な外科医デプランが、彼の長所も短所も明晰に把握した日から始まった。その長所にしても短所にしても、彼の友人たちにとっては、どちらもあいまって、オラース・ピアンシヨンの医師を貴重な存在と思わせているものであった。臨床分野を率いている者が、一人の青年に目をかけて彼をその膝もとにおくということは、いわば、この青年は出世の階段に足を載せたということである。デプランは、裕福な家には、自分の助手をさせるために欠かさずピアンシヨンを連れて行った。そこではほとんど常に、なにがしかの特別手当が研修医の懐に入った。しかも、そこに行けば、知らず知らずのうちにパリの生活の秘密が田舎者の目にも明かされるのだった。また、デプランは、患者を診るとき、診察室に彼をおき、手伝いをさせた。ときには、金持ちの病人を湯治に行かせる際、その同伴をさせることもあった。要するに、彼は、ピアンシヨンに顧客を作ってやっていたのである。

ある期間、外科の帝王に盲目的に従う男がいたのは、こうしたわけであった。彼ら二人の一方は、名誉と学問の頂点にいて、莫大な財産と大きな栄光を享受し、もう一方は、財産も栄光もない慎ましい末端の人間だったが、親密だった。偉大なデプランは、研修医にすべてを話した。だから、研修医は、某夫人が師の傍らにある椅子に座ったかどうか、あるいは彼女が、診察室に置かれている、デプランが仮眠をとるあの有名な長椅子

に、座ったかどうか知っていた。ピアンシヨンは、ライオンと雄牛のごとき精力的気質を持つこの男の、それが原因でついには偉人の上半身が大きく膨らんで心臓肥大によって死ぬことになるこの男の、様々な秘密を知っていた。彼は、デプランのあれほどにも多忙な生活における奇妙な点や、あんなにさもしい吝嗇の中にある計画や、学者の外貌の下に隠された政治家の願望を注意深く観察した。そこから、ピアンシヨンは、青銅の心というよりむしろ青銅の殻をかぶったあの心の奥には、ただ一つの感情が潜んでおり、それを待ちうけているものは様々な失望に違いないと思うに至った。

ある日のこと、ピアンシヨンはデプランに、サン＝ジャック街のある貧しい水売りが、貧困と疲れのためにひどい病にかかっている、と話した。このオーヴェルニュ出身の貧しい男は、一八二一年の寒さ厳しき冬、ジャガイモしか食べていなかった。デプランは、患者をみな放置し、ピアンシヨンを連れて、馬を潰しても構わないというほどの勢いで、その貧乏人のもとへ飛んで行った。そして、自ら指示してフォーブール・サン＝ドゥニ街にある有名なデュボワの設立した病院へ男を移した。彼は男を手当てしに通い、全快したときには、馬と樽を買うのに十分な金を与えた。このオーヴェルニュ出身の男は誰にも似ていない独特の顔たちをしていた。彼は友人の一人が病にかかると、すぐにデプランのところに連れて来て、恩人に向かつて、「他の先生のところに行くと、心配でたまらないもんだから」と言った。デプランは、ひどく不愛想な男ではあったが、水売りの手を握って、「みんな私のところに連れて来て」と言った。そして、カンタル出身のその男を市立病院に入院させ、手厚い治療を施した。ピアンシヨンは、既に何度も、師の中にオーヴェルニュ人に対する、とりわけ水売りに対する、特別な感情があることに気付いていたが、デプランはある種の誇りをもって市立病院での治療に当たっていたから、あまりに不自然だと感じさせられるようなことは何もなかった。

ピアンシヨンはサン＝シユルピス広場を横断していたある日のこと、午前9時頃だったか、師が教会の中に



入って行くのに気づいた。デプランはその頃、一歩外に出るのにも必ず自分の軽馬車カブリオレを使っていたにもかかわらず、徒歩であった。しかも、教会の裏手のプティリヨン通りのドアから、あたかもいかがわしい家の中に入るかのように滑り込んでいった。師の自説をよく知っており、自らもY字の魔法(注5)(ラプレー)においてはすごい魔法らしい)にかかったような徹底したカバニスの物質主義者(注5)だった研修医は、当然好奇心のとりこになって、そつとサンシユルピス教会の中に入った。そして、外科手術の対象になることもなければ胃腸に孔があいたり胃炎になったりすることもない天使たちに対してまったく無慈悲なあの無神論者の大デプランが、要するに、豪胆な神の嘲弄者が、へりくだって跪いているのを見て、ピアンシオンは並大抵でない驚愕に襲われた。しかも、それがどこでかといえは、聖母マリアの礼拝堂の前である。デプランはそこで、あたかもこれから手術に臨むかのような真面目な様子で、ミサに参列し、喜捨をし、貧乏人に施しをしたのである。

「先生が、聖母マリアの出産に関する疑問を解明するためにここに来た、なんてことは絶対ない」と、途方もない驚きを抱いたピアンシオンは、独り言ひとごちた。たとえ、聖体祭に、師が移動天蓋の紐の一本を持っているのを見たとしても、ただ笑うばかりだったろう。ところが、こんな時間に、ただ一人、立ち会う者もなくいるのを見て、当然のこと、そこには考えこまさせられるものがあつたのである。

ピアンシオンは、市立病院の筆頭外科医を密偵するような真似はしたくなかつたから、その場を立ち去つた。その同じ日、偶然にも、デプランは、自宅ではなくレストランでご馳走するから、と、ピアンシオンを夕食に誘つた。ピアンシオンは、巧みに準備して、食事も終わりの寛いだ頃くわいだを見計らつて、ついに、ミサというものについて、笑劇か茶番劇みたいだ、と言いながら話題にした。

「茶番劇だね」と、デプランは言つた。「このおかげで、キリスト教国では、ナポレオンの戦い全部を合わせたよりも、ブルセー(注6)が治療で蛭に吸わせた血を全部合わせたよりも、もつとたくさん(注6)の血が流されたわけ

だ。ミサは法王が發明したもので、六世紀以上前には遡らない。最後の晩餐でイエスが『これが私の体だ』と言ったことを基にして作られたんだ。聖体祭を制度化するために、どれほど多くの鮮血がほとばしったことか。ローマ教皇庁のほうは、(キリスト現存)<sup>(注7)</sup>論争事件における、つまりは三世紀間にわたって教会を混乱させた教会大分裂における自分たちの勝利を、この制度を作ることによって確証しようとしたんだ。トゥールーズ伯とアルビジョワ派との戦争も、この事件が最終的に起こしたことだよ。ヴォドワ派もアルビジョワ派も、この革新的制度を認めるのを拒んだからだね。

要するに、デプランは、才気煥発な無神論者の口説を、次から次に浮かんでくるがままに語って上機嫌だった。それはまさに、ヴォルテル流の冗談の連発であり、『引用集』<sup>(注8)</sup>のひどいパロディだった。

「いやはや、今朝の敬虔な先生はどこへ行っちゃったんだろ」と、ビアンシオンは心の中で思った。

彼は誰にも話さなかった。サンシユルピス教会で師を見たことすら、怪しく思われてきた。デプランがビアンシオンにわざわざ嘘をつく必要などないからだ。二人は互いにこの上ないほど分かり合っていた。既に、宗教と同様に重大な問題についても、互いの考えを述べ合い、(事物の本質について)<sup>(注9)</sup>、宇宙の体系について、宗教とは無縁のメスとナイフで探求し分析しながら、議論を交わしていた。

三ヶ月が過ぎた。ビアンシオンは、あの出来事が記憶に深く刻まれてはいたが、それに結論を出してはいなかった。その年のある日のこと、市立病院の医師の一人が、ビアンシオンの前で、訊問でもするみたいにデプランの腕を取って引き止めた。

「先生、先生はいったい何しにサンシユルピスに行つたんですか？」と、彼は訊いた。

「あ、あそこにはね、司祭に会いに行つたんですよ。膝のカリエスを患っているもので、アングレーム公爵夫人が私を推薦してくれたのです」と、デプランは言った。

その医師は、それでうまくごまかされて事実を聞けてはいなかったが、了承した。しかし、ピアンシオンは違った。

「えー！ 病人の膝を診に教会に行つたつて！ いやミサに参列するために行つてたんでしょ」と、研修医は心の中で言った。

ピアンシオンは、デプランを待ち伏せしてみようと決心した。彼は、師がサンシユルピス教会に入るのを目撃した日時を思い出して、翌年の同じ日、同じ時刻に、師を再びそこで見かけることができるかどうか、行つて確かめる決心をした。このような場合であるなら、師が敬虔な信心から定期的に教会に行つていという事実に対して、科学的な調査をする、ということが許されるだろう。というのも、デプランの様な人間において、思想と行動との間に真つ向から矛盾するものが見られるなどということは、ありえないことだったからだ。

次の年、同じ日、同じ時刻に、既にデプランの研修医ではなくなっていたピアンシオンは、外科医の軽馬車がトゥルノン通りとプティ・リヨン通りとの角で停車し、師が、イエズス会士然とした陰険な様子で、そこから壁に沿って歩いてサンシユルピス教会へと入つて行くのを見た。そして、聖母マリアの祭壇の前で、師は再びミサに参列したのだった。たしかに、それはデプランだった。外科医長の。心底では無神論者だと思つが、もしかすると信心家なのかもしれない。何が何だかわからなくなつてきた。この著名な外科医の規則的行動が、あらゆることを複雑にしていた。

ピアンシオンは、デプランが出て行くと、礼拝堂を片づけに来た聖具納室係に近づいて、あの人はよく来るのか、と尋ねた。すると聖具納室係は、

「私がここにきてから二十年になりますが、デプラン様は、そのとき以来、年に4度、このミサに参列する

ためにいらつしやっています。あの方が創設されたものです。」と言つた。

彼が創設したんだつて！ ビアンシヨンは教会を後にしながら独り言ちた。この事實は、それ一事で医者に信仰心をなくさせてしまふ（無原罪の御宿り）<sup>(注10)</sup>に匹敵するくらい不可解な秘密だ。

それからしばらく時が経つた。医師ビアンシヨンは、デプランの親しい友ではあったが、その間、彼の人生におけるこの特別な事情について話が出来ような機会に恵まれることはなかつた。たとえ二人が、診察の場や社交界で出会つたとしても、暖炉の薪置き台に足をのせながら、肘掛椅子の背に頭をもたせかけて、互いに自分たちの秘密について話を交わすような、あの二人だけの親密な時間を見つけることは難かつた。

かくして7年が過ぎ去り、一八三〇年の革命（注一七月革命）後、民衆が大司教館に押し寄せたときのこと、つまり共和主義思想の熱を帯びた頭で、パリの渺漠たる家々の大海の上にきらめくように浮かび出ているいくつもの金色の十字架を、民衆が倒壊させようと逸<sup>(注11)</sup>ついているとき、ビアンシヨンは、再びデプランがサン・シルピス教会に並べて巷にどつしり腰を下ろしていたときのこと、ビアンシヨンは、隣に腰かけた。友は彼に目配せ一つせず、少入つてゆくのを目撃した。ビアンシヨンは彼の後について行き、隣に腰かけた。友は彼に目配せ一つせず、少しも驚いた様子を見せなかつた。二人は共に、彼が創設したミサに参列した。

教会を出ると、ビアンシヨンはデプランに言つた。

「先生、どうしてこんな俗な信心家のような真似をしているのか教えてください。先生がミサに通うのを見たのは、これで三度目です。誰あろう、先生が！ この秘密の理由を言つて下さい。先生のお考えと行動との間にある紛れもない不一致はどうしてなのか説明して下さい。先生は神など信じてはいない。なのにミサに通っている！ 先生、あなたは私の質問に答える義務があるはずです。」

「私は多くの信心家に似ているし、外見だけ深く宗教に帰依している人間にも似ている、でも、また、君も

「ほくもそうだと思いが、無神論者にも似ている。」

「そう言うと、彼の口からは何人かの政治家を当てこすった警句が奔流のように飛び出した。その中の最も有名な人物は、さながらモリエールのタルチュフの現代版とでも言うべき人物(注12)であった。」

「そんな話をして下さいとお願ひしているのではありません」とピアンシオンは言った。「先生は何をしにここに来るのか、なぜこのミサを創設なさったのか、その理由が知りたいのです。」

「たしかに、そうだね」とデプランは言った。「私はもう片足を棺桶に入れている。君に私の人生がどうやって始まったのか話してもいいかもしれないね。」

そのとき、ピアンシオンとこの偉大な男はカトル・ヴァン街に来ていた。そこはバリでも最もおぞましい通りの一つだった。

デプランは、オベリスクみたいに突き立っているこのあたりの建物の一つに入り、7階まで上がって行った。建物の左右不揃いのドアは、小路の側に面していて、その小路の奥には曲がりくねった階段があり、まさに「苦しみの光」という意味の名がついた採光窓からの光で照らされていた。(注13)それは緑がかつた薄汚い建物で、一階には家具商人が住んでおり、各階には、それぞれ違った貧困が所を得ているようだった。デプランは、力を込めた腕を上げて、ピアンシオンに言った。

「私は2年間、この建物の上に住んだよ。」

「知っています。ダルテスもそこに居ましたね。青春時代、私はほとんど毎日のようにここに通っています。当時、われわれはそこを大物の貯蔵瓶と呼んでいました。それで？」

「私が聴いていたミサは、ここでのいろいろな出来事と関わりがあつてね。当時、私は、君がダルテスが居たと言つた屋根裏部屋に住んでいた。あそこだよ、窓の外に植木鉢があつて、その上に洗濯物のかかったロー

プが揺れているだろ、あそこだ。私の人生の始まりはことさら厳しいものだったから、パリにおける苦勞の一等賞という栄冠なら、どんな人とも競うことができるね。私はあらゆるものを耐え忍んだ。腹をすかせ、のど渴きも癒すことができず、無一文で、上着もなければ、靴も下着もないという、貧困の最も厳しい状態のすべてを経験した。手がかじかんでも、大物の貯蔵瓶では息を吹きかけていた。そこに君ともう一度行ってみたいと思つてね。冬の間、私は頭に湯気を立てて勉強したものだよ。凍てついた日、汗をかいた馬から湯気が見えるように、自分の汗から湯気が立っているのがわかった。こんな生活を耐え忍ぶのに、人にはどこに支えがあるのだろうか。私にはわからない。私は、孤独で、助けもなく、一文無しで、本を買う金も、医学の勉強に必要な出費をまかなう金もなかった。友だちもなかった。短気で怒りっぽくて心配性の性格から、嫌な奴だと思われていたからね。誰も、私のいら立ちの中に、生活の不安や、自分がいる社会のどん底から水面にまで上がろうとあえていっている人間の苦勞を見ようとはしてくれなかった。しかし、君だから、そう、目の前にいるのが自分を取り繕う必要のない君だから言えるけれど、私には善良な素地と生き生きとした感性があつた。それは、貧困の泥沼の中で長いあいだ前に進もうとしてもなかなか進めない苦勞を舐めた末に、ついにはどこかの頂に這い上がることができる強い人間には不可欠の素地だろう。私には、与えられた不十分な下宿屋以外、家族からも故郷からも引き出しうるものは何もなくかつた。仕方ないから、その頃、私は、朝プティリオン街のパン屋が、前日か前々日のものだから安く売っていたプチ・パンと、それを細かく砕いて牛乳に入れたものを食べていた。こうすれば朝食は二スー（注一20分の1フラン・約一〇〇円）しかかからなかつた。夕食は、下宿屋では十六スーもしたから、二日に一ぺんしか食べなかつた。だから一日に使つた金は9スーにしかならなかつた。君は、私が上着や靴をどれくらい大事にしていたか、本人同様よく知っているだろう。君も私も、靴の片方がほころびてしかめっ面して笑っているような状態になつてるのに気がついたり、フロックコートの袖付け

が音をたてて破れるのを聞いたりすると、悲しくなったものだが、いまになって思えば、同僚に裏切られたって、この悲しみ以上の悲しみを感じたかどうかはわからないね。私が飲むのは水ばかりで、カフェに對してはこの上ない尊敬を抱いていた。カフェ・ゾツピは、私には、ローマ帝国のルクルス(注14)の様な人たちだけが入ることのできる約束の地のように思われていたよ。」

「ときおり私は思うのだが、昔、そこでカフェ・クリームを飲んだり、ドミノゲームをして遊んだりといったことができたろうか、と。結局のところ、私は、貧困が私の心に吹き込んだ熱烈な思いを、勉学の中に投入したのだ。大きな価値のある人間になるために、いつか無価値な者から脱して地位を得る日には、その地位にふさわしい人間になろうと、有用な知識をすべて習得しようと努めた。パン代よりも油代のほうに余計に金を使っただ。あの頃勉学に打ち込んでいた夜を照らした明かりは、食事代よりも高くついた。この闘いは長く、執拗で、慰めのないものだった。私には、自分の周りにいる若者たちと友だちになろうという気が全然起きなかった。友だちを持つには、彼らと親しくなつて一緒に飲みに行くために、いくらか金を持つていなければならぬし、学生たちが行くあちこちの場所に一緒に行かねばならない。だが、私には何もなかった！ パリの人間は誰も、何もないとは本当に何もなことなのだ、ということが想像できない。私は自分の貧困が露わになりそうになったとき、ちよūdわれわれの患者がまるで小さな球が食道から喉頭に上がつてくるように感じる、あの神経の引きつりをのびに感じたものだ。後に、私はこれまで一度も何にも不自由したことはない生まれながらの金持ちと出会つたが、彼らには、若者対犯罪は一〇〇スー(注15)フラン銀貨一枚。約五〇〇〇円) 対Xだという比例算の問題が理解できない。あの金ぴかのおバカさんたちは、私に、いったいどうして借金などしたんでしょうか？ なぜつらい負担になる債務契約なんて結んだのでしょうか？ などと言う。私は、民衆が飢えて死にそうなることを知つて、「どうしてお菓子を買わないのかしら」と言つた、あのオースト

リア皇女（注一マリーアントワネット）と彼らが、同じ輩やからに思えたね。どこかの金持ちが、私の手術を受けなければならなくなつて、その代金が高すぎると不平を鳴らすところを是非見たいものだと思わずにいられるだろうか？ 私は、パリでたった一人で、一文無しで、友もなく、信用もなく、生きるために五本の指で働かねばならなかつたからね。その金持ちはどうするだろう？ 自分の飢えを満たしにどこに行くだろう？ ビアンシオン君、君はいくど私が辛辣で厳しいところを見ているだろうが、それは、そのとき私が、自分の青春期の苦しみと、上流社会で数え切れないほどその証拠を見た無感覚とエゴイスムとを重ね合わせて見ていたからだよ。あるいは、私が成功する段になると、憎悪や羨望や嫉妬から中傷して邪魔立てしたことを思い出したからだよ。パリでは、君が鎧あぶみに足をかけようとしているのを見ると、君を落馬させてその頭をかち割るために、ある者は燕尾服の垂れを引っ張るし、またある者は鞍の取り付けベルトを緩めようとする。こちらの者は馬の金具を外し、あちらの者は鞭を盗む。最も卑怯でない者は、堂々と君のところに来て、至近距離でピストルを一発お見舞いする者さ。君はとても才能があるから、そう、いずれ、君は凡庸な者どもが優れた者にかけてくる恐ろしい止むことのない戦いを知ることになる。ある晩、二五ルイ（注一五〇フラン、約五〇万円）すつたとしよう。翌日、君は遊び人と非難されることになる。しかも、最良の友人たちが、前夜君は二五〇〇フランすつたと言いつらさだろう。頭が痛いと言つてみたまえ、氣違いにされるから。澆瀆と行動してみたまえ、礼儀を知らないと言われるから。こんな小人族の争いに関わらないために、君がより大きな力を身につけたとしよう、すると君のより良き友人たちは、手紙のやり取りの中で、君がすべてを貪り食うつもりであると、また支配者になつてやりたい放題やるつもりでいる、と書くことだろう。要するに、君の美点は欠点になり、欠点は悪徳になり、美徳は犯罪になるんだ。たとえ、君が誰かの命を救つたとしても、殺したことになる。その患者がまた来てみたまえ、君は、相変わらず目先のことばかり見て先のことなど考えずに治



療したということにされる。患者は死んでいなくても、いつかは死ぬのだからね。躓けば転んだことにされる。何事につけ新しいことをすれば、そんな権利はないと非難され、若者に出世させたくない気難しい人間、狡猾な人間ということになる。だから、君、私は神を信じないとしても、それ以上に人間を信じないんだ。

君は、私の中に、誰もが悪くいうデプランとは全く違うデプランがいるのを知らないかい？ いや、泥の山を詮索するのはやめよう。ともかく、私はこの家に住んでいたわけだ。最初の試験に合格しようと思強していた。そして無一文だった。それで、わかるよね、私は、人が「軍隊にでも入ろうか」と考えるほどの土壇場の状況に立ち至ったんだ。希望が一つあった。田舎から下着のいっばい詰まったトランクが届くことになっていた。それは、君の周りにもよくいるだろ、パリのことなど全然知らず、月に三〇フランもあれば甥は最高に旨いものが食べられると想像しつつ、シャツはあるんだからと考えて下着を送る、そういう叔母からのプレゼントだった。トランクは、私が大学に行っている間に届いた。運送料が四〇フランした。門番は、階段下の小部屋に住んでいるドイツ人の靴修理屋で、その代金を立て替えてトランクを保管していた。私はフォッセ・サン・ジェルマン・デブレ通りやエコル・ド・メドウ・シンヌ通りをただぐるぐる歩きながら、四〇フラン出すことなしに自分のトランクを引き渡してもらおう術策はないものかと考えたが、そんなことが思いつくはずもなかった。もちろん、その金は下着を売って払うつもりでいたんだよ。どうにもできない自分の愚かしさから、所詮私には、外科医になる以外に何の才もない、とわかったね。でもね、君、繊細な心を持っている人間は、その力をレヴェルの高い領域で發揮できるけれど、こうした策を思いつくような機転や窮地を切り抜けたり企てて成功させたりさせる豊かな策略の才に欠けているものだよ。そういう人間においては、天才は偶然に現れ出るものなんだ。何かを探すのではなく、出会うものなんだ。仕方ないから、私は深夜、部屋に戻った。そのとき隣人も帰ってきた。男は水売りで、名をブルジャといい、サン・フルール（注！オーベルニュの寒

村)出身の男だった。

われわれは互いのことを、同じ階にそれぞれの部屋がある店子が、互いの寢息を聞き、咳をするのを聞き、服を着る音を聞いて、その人間が存在していることに慣れてしまふ、といった程度には知っていた。その隣人が、私が三ヶ月分の家賃を滞納したために、大家は私を追い出すことにした、ということを教えてくれた。翌日、私は出て行かねばならなくなつたんだ。しかも彼自信も、その生業が原因で追い立てを食らつていた。私は生涯でも最もつらい夜を過ごしたよ。自分のみすばらしい家財と本を持つて行くために、どこで引越し屋を雇つたらいいのか、引越し屋と門番にどうやって金を支払つたらいいのか、どこに行つたらいいのか? この解決しようのない問題を、気の狂つた人間が同じことを繰り返し繰り返すように、涙にくれて自問し続けた。そうして眠つてしまつた。それでも、貧困というものは、貧しい者のために、美しい夢に満ちた神々しい眠りをくれるものだね。

翌日の朝、ボールに入れた牛乳にちぎつたパンを潰けた朝食を食べていたら、ブルジャが入つて来て、私にひどい訛りでこう言つた。「学生さん、おら、貧乏人で、シャンフルール(注一)サンフルール(注二)の病院に捨てられた孤児だ。オヤジもオッカアもない。その上、所帯持つほどの金もねえ。あんたもやっぱり、頼りにできる親戚もいなくて、これといった物も持つてねえんだべ。なあ、おら、下に荷車置いてあるんだ。一時間二スーで借りたもんだ。おれらの持ち物は全部そこに積めるよ。もしあんたさえよかつたら、一緒に住むとこ探すべ。おれら、こつから追い出されたんだからさ。ここは、どのみち、地上の楽園つてとこじゃないべえ。」

「よくわかつてる、ブルジャ」と私は言つた。「でも、困つたことがあるんだ。下に一〇〇エキユ(注一三〇〇フラン)分の下着の入つたトランクが届いていて、それを売れば大家に支払いができるのだけれど、運

送貨を門番に立て替えてもらっていて、銀貨一枚（注一五フラン）持っていないんだ。」

「そんなことか、銭なら、おら、いくらがあるよ。」と、ブルジャは汚い革の古びた財布を私に見せながら、「下着をもらいな」と陽気に答えた。

ブルジャは、私の三ヶ月分の家賃と自分の家賃を支払い、門番への精算も済ませた。それから彼は、私の家具と下着を荷車に積んで、通りから通りへと、空室の札が下がっている家に行き当たるときに家の前で止まりながら、車を引いて歩いた。私の方は、その物件が自分たちにふさわしいかどうか見るために、建物に入って階段を上った。昼になつてもなお、われわれは何も見つけられず、カルチェ・ラタンをさまよっていた。家賃が大きな障害だった。居酒屋で昼めしを食べようとブルジャが言うので、荷車を店の前に止めた。夕方近くになつて、コメルス小路のロアンの中庭に面した建物の屋根裏に、階段で隔てられた二つの部屋があるのを見つけた。われわれはそこを、それぞれ年六〇フランで借りた。ここぞ、私とわが貧しき友との落ち着き先だった。われわれは夕食を共にした。

ブルジャには、日にだいたい五〇スーの稼ぎがあり、そのとき一〇〇エキユほどの蓄えがあつた。もうじき、樽と馬を買うのだという宿願が、実現できそうなところまで来ていた。ところが、彼は、いま思い出しても心が揺さぶられるが、ずるがしこいまでの深慮と善良さで私の秘密を聞き出して、私の苦境を知ると、生涯の夢であつたものを当分諦めることにしたのだ。二十二年前から路上で商売をしていたブルジャが、私の将来のために、自分の一〇〇エキユを犠牲にしたのだよ。

ここまで話すと、デプランはビアンシヨンの腕を不意に力強く握った。「試験に必要な金も、彼が出してくれたんだ！ この男は、君、私には使命があると、私の知性に必要なものは自分が必要とするものに優先する、と考えるにいたつたんだ。なにくれと私の世話を焼いて、私を、坊、と呼び、本を買うのに必要な金を貸

してくれ、たまにそつと部屋に来ては、私が勉強しているのを見ていた。ついには、私にはそれしか食べられなかつた不十分で粗悪な食べ物に替えて、体に良い栄養豊かな食べ物を食べさせるために、まるで母親のような気遣いをした。ブルジャは、四十くらいの男で、中世の町人みたいな顔つきをしていた。おでこが出ていて、画家がリユキュルゴス（注一）スバルタの伝説的な立法者）を描こうとするなら、彼をモデルにしてポーズをとらせたかもしれないような顔だった。この貧しい男は、自分の心に、注ぎたい愛情があふれているのを感じていたんだ。これまで唯一彼の心を動かしてきたのはブードル犬だったが、それがしばらく前に死んだ。彼は犬の話をするたびに、教会は愛犬の魂の平安のためにミサを挙げてくれるだろうか、と私の考えを尋ねていた。彼の言によれば、犬は本当のキリスト教徒だった。教会にいつも一緒に行つたが一度も吠えたことがなく、オルガンの音を聞いても牙をむいたことはないし、共に祈りを捧げているとしか思えない様子で、傍らにじつと伏せている、というのだ。こうした愛情のすべてを、この男は、こんどは私の方へ注いだんだ。彼は私を、かけがえないそして苦しんでいる存在として受け入れたんだ。彼は私にとって、最も注意深い母親となり、最もこまやかな恩人となり、自分の作品を作り上げること喜びを見出す美德の権化となつた。

彼と通りで出会うと、彼は、思いもよらない気品に満ちた知性を感じさせるまなざしで、私を見るのだ。その時、彼は、あたかも何も運んでいないかのように装つて歩いた。私が健康で、ちゃんとした身なりをしているのを見て、うれしそうだった。それは、言うなれば、高度な領域にまで高められた庶民の献身であり、お針子の愛だった。ブルジャは私に必要なものを買いにゆき、夜、頼んだ時間に起こし、ランプを掃除し、踊り場を磨いた。よき召使であると同時によき父であり、イギリス娘のように清潔だった。彼は掃除をし、フィロポイメン(注二)のように薪を切り、なすことすべてに威厳を含んだ簡潔さがかよっていた。それは、気高い目的がすべてを高貴にする<sup>(注三)</sup>と理解していたからのように見えた。

私が研修医として私立病院に入るために、この純朴な男のもとから離れるときがくると、彼は、もう私とは暮らすことができないのかと考えて、言いようもない重い苦しみを覚えていた。それでも彼は、私が学位論文を書き上げるために必要な金を、自分が集めるのだという計画を抱いて自らを慰め、外出できる日には会いに来るよう私に約束させた。ブルジャの誇りは私だった。彼は、私のためにそして自らのために、私を愛していた。もし君が私の学位論文を探し出したら、それは彼に献呈されていることがわかるだろう。

研修医となつて最後の年、私はかなり金を稼ぐことができたので、この立派なオーヴェルニュ人に馬と樽を買つてやつて、これまで借りてきたものを返すことができた。だが、彼は、私が自分の大事な金を使つたと知ると、ひどく怒つた。にもかかわらず、やつと宿願がかなえられたのを見ると、彼は感動し、微笑み、私を叱り、そして樽と馬を見ながら、「こんなことはよくねえだ。ああ、それにしても、立派な樽だなあ。あんたのやることはよくねえよ、馬だつてオーヴェルニュの人間みてえに頑丈だ」と言いながら、涙をぬぐつた。いまだかつて、私はこれほど胸打たれる光景に出会つたことがない。ブルジャは、どうしても私に、銀の飾りのついた診察かばんを買つてやるんだと言つてきかなかつた。私の診察室で君も見ていたあれだよ。だから、あのかばんは、私にとって最も大事なもののなんだ。彼は、私の最初の成功を見て酔っていたが、「この男が成功したのは私のおかげだ」とでもいわんとする言葉も、態度も、みじんも見せることはなかつた。にもかかわらず、彼がいなければ、私は貧しさに命を奪われていたことは間違いないんだ。この貧しい男は、私のために命の限りを尽くしたのだ。彼が食べるものといえば、ニンニクをこすりつけたパンだけだ。それは私が徹夜で勉強するために、コーヒーを飲むからなんだ。

彼が病に倒れた。想像できるだろうが、毎晩ぼくは彼の枕元で徹夜した。最初はなんとか助けることができた。しかし、二年後、病が再発した。懸命に治療したし、最大限の医学的な努力も払つたが、その甲斐なく、

死は不可避だった。国王だつてこんな手厚い看護は受けないよ。そうだよ、ビアンション、私は、死からこの命を奪い返すために、途方もないことだつて試した。私は彼をもつと生かしておきたかった。自分がどんなことをなしたのか見てもらうために、彼の願いをみんなかなえてやるために、私の心を満たしているただ一つの感謝の念を何とかして満たすために、いまでもなお私の心を焼く炎を鎮めるために。」

「ブルジャは」とデブランは、ひととき間をおいて、明らかに胸に迫るものがある様子で言葉を続けた。「私のもう一人の父親は、私の腕の中で息を引き取った。自分の持つてゐるものをすべて私に残したが、その遺志を記すために代書屋に書かせた遺書は、われわれがロアンの中庭に引越して来たその年の日付だった。この男は貧しい民衆の純朴な信仰を持っていた。彼は自分の妻を愛するように聖母マリアを愛していた。熱心なカトリックではあつたが、私の無信仰については、一度も、一言も、言つたことはなかつた。死が近づいてくると、彼は、教会の救いを得るために、どんなことも惜しまずにしてくれるよう、私に願つた。私は毎日彼のためにミサを挙げさせた。夜、ときどき、彼は未来に対する恐れを口にするこゝろがあつた。充分に清い生活をしてこなかつたと恐れていたのだ。憐れな男、彼は朝から晩まで働いてきたのだ。もし天国があるなら、彼でなくっていったい誰が天国に入るといふのだろう。彼は聖人のごとく終油の秘跡を受けたが、彼こそは聖人だった。その死はその生涯に似つかわしいものだった。

墓まで遺体につき従つたのは、私ひとりだった。ただ一人の恩人を土にかえずとき、どうしたら彼の恩に報いることができるのだろうかと私は考え続けた。彼には家族もなく、友もなく、妻もなく、子もないことは分かつていた。だが、そうだ、と私は思った。堅い信心があつた。それをどうこういうなど、そんな資格が私にあつたらうか。彼は私に、おずおずと、死者の平安のために捧げられるミサのことを話したことがあつた。それをさせるのにかかるお金のことを考えて、そんな義務を私に課そうなどという気持ちを持つてはいなかつた。

わたしは生活の基盤ができあがるとすぐ、サン・シユルピス教会に年に四度ミサを挙げさせるために必要な金を納めた。私が唯一ブルジャにしてやれることといえば、彼の篤い信仰心からきていた望みをかなえてやることだけなのだ。だから私は、各季節の始まりのミサが挙げられる日に、彼の名でそこに行き、彼のために、彼が望んでいた祈りの言葉を唱えるのだ。懷疑論者の衷心からの気持ちを含めて、私は言うのだ。「神よ、もしこの世で全き行いをなしたものが死後入れられるべき世界があるのなら、善良なるブルジャのことを考えたまえ。彼に何か課されるべき苦しみがあるならば、その苦しみは私に与えたまえ。天国といわれるところへ、その魂がすみやかに入らんがために」と。

以上だ。これが、君、自分の思想信条を持った人間に許されうることのすべてだ。神はいい悪魔にちがいないよ。私のことなどは、どうでもいいんだ。誓って言うけどね、ブルジャの信仰をわたしの頭に入れられるならば、私は全財産を使ってもいいよ。

デブランを臨終まで治療したピアンシオンは、今日、かの著名な外科医が無神論者として死んだとはあえて言おうとしない。神を信じる人なら、そのとき貧しいオーヴェルニュ男が彼のために天国の門を開けて来ていると考えるのではあるまいか。かつて、ちょうど同じように、この男が、破風に「偉人たちよ、祖国は感謝する」と記された地上の聖堂（注一）国家の偉人を祀る靈廟パントエオンのこと）の扉を開けてやったように。

（一八三六年一月、パリ）

注

注一 交感神経幹と脳脊髄神経は、3つの大きな結節部を、胸部、腹部、骨盤部の、それぞれ脊柱前部に持っている。それを、心臓神経叢、太陽神経叢、下腹神経叢といっている。

太陽神経叢はみぞおちの近くにあり、胃・肝臓・すい臓、腎臓といった腹部重要臓器と深い繋がりをもっている。自律

神経の中樞は、間脳の視床下部にあるが、各臓器は神経叢の自律神経にコントロールされて働いている。視床下部と諸臓器の間には長い距離があり、脳が担うよりも神経叢によって制御される方が生体維持に有利だからである。中でも、太陽神経叢は最も重要な神経叢とされ、激しい喜怒哀楽が臓器にも影響を与えることから、古来「第二の脳」とも、感情の一部を担っている、とも考える人がいる。

注2

一八〇四年、ナポレオンはイギリス本土を攻撃するため、イギリスに最も近い港町の一つ、ブローニーニユに、軍団と船舶を集めた。しかし、翌一八〇五年、制海権の行方を左右するトラファルガーの海戦で、フランス・スペイン連合海軍がネルソン提督のイギリス海軍に敗北したために、上陸作戦は頓挫する。その後、ナポレオン帝政は瓦解し、復古王政となるが、一八二二年ヴェローナ会議において、英仏は再び対立する。スペインをめぐって、ブルボン家出身のフェルディナンド7世 Ferdinand VII を擁護しようとするフランスと、自由主義的勢力を擁護しようとするイギリスとが衝突したのである。結局、英仏は体制が変わっても覇権をめぐって利害対立する宿命の敵、ということだが、そのことが多くの人に理解されるには、一八二二年を待たねばならなかった、というほどの意味だと思われる。

注3

サン＝ミシエル勲章の黒綬。一八一六年十一月十六日の勅令によって定められたサン＝ミシエル勲章は、国家に貢献した作家、芸術家、学者などに与えられた。古くは、十五世紀、ルイ十一世によって設立されたサン＝ミシエル騎士団以来の伝統を持つ。一八三〇年八月十四日、ルイ＝フィリップの新憲法制定によって、この勲章は廃止された。

注4

オレステスはギリシャ神話の人物で、ミュケナイ王アガメムノンとその妻クリュタイムネストラの子。アガメムノンがトロイア戦争に勝利して帰還すると、王妃は、留守中アイギストスと関係を持っていて、二人は、王を謀殺する。このとき、まだ少年だったオレステスは、姉エレクトラに引かれて、叔父フォキス王のもとに身を寄せる。フォキスは、オレステスを息子ピュラデスとともに育て、二人には厚い友情が生まれる。オレステスが成人するとまもなく、アポロンから神託が下って、父の仇を討つことを命ぜられる。オレステスはピュラデスを伴ってミュケナイに帰り、友の助けによって神託の命を果たす。しかし、復讐の女神エリニユスたちは、彼を母殺しの罪で追及し、オレステスは半ば狂乱して各地をさまよった。

注5

Pierre Jean Georges Cabanis (1757-1808)



カパニスはフランスの哲学者、医学者。パリ大学医学部教授。観念学派の物質主義者（唯物論者 *matérialiste*）で、コンディヤックの感覚論を生理学的に発展させた。主著『肉体と精神との関係論 *Traité du physique et du moral de l'homme*』（1802）において、精神的現象は身体の生理的事象との関連において説明されるべきであると主張し、機械論的説明を重視、オーギュスト・コントからイッポリット・テーヌに続く実証主義の源流とされる。

注6 医師ブルセー（*Broussais*, 1772-1838）は、何らかの刺激によって器官に血液が過剰に流入することで炎症が生じると考えた。そこで、余計な血を蛭を使って抜くことによつて炎症を収めるといふ治療を創始して、有名になる。

注7 *la Presence Réelle* 「キリスト現存」「まことの現存」「キリスト臨在」

ミサにおいて、パンと葡萄酒が単なる象徴ではなく、靈的に本当にキリストの肉と血に変わる、とすること。カトリック中央協議会は、ホームページで、それについて次の様に述べている。「イエス・キリストは、秘跡において、目に見えるしるしを通じて働かれる。このしるしは、その目に見える姿を変えることなく、聖なるものとなる力を与えられる。キリストは聖体の御からだと御血のうちに、その靈魂と神性において現存し、すべての人にご自身とご自分のいのちを与える。」

注8 『引用集 *Citateur*』

ビゴールブラン *Pigault-Lebrun* が書いた一八〇三年の著作。二分冊。諧謔を自由自在に用いて、カトリック教会に対する批判、非難を容赦なく申し立てた書。

注9 *De natura rerum* デ・レラム・ナトゥラ（ラテン語）、フランス語では、*De la nature des choses*

ルクレティウス（*BC 94?-55?*）の原子論、宇宙論を内容とした全6巻からなる大長編詩。邦訳ではこの詩の表題は『自然について』『事物の根本原理について』『物の本質について』『宇宙論』などとされている。この詩は、エピクロス哲学をもとに、無数の原子と原子の運動の場である空虚が存在するという立場から宇宙の生成を、韻文によつて格調高く謳いかつ説明している。

全米図書賞、ピューリッツァー賞をとつて、ベストセラーとなったステイヴン・グリーンブラットの『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』によれば、埋もれた古代の名著を探索することを趣味としていたローマ教皇庁の書記官ポツ

ジョ・ブラッチョリーニは、ドイツの修道院で、この書を発見。筆写して、同じ人文主義的思想を持つ仲間たちの間で回覧した。そこから広がった哲学的思想的衝撃が、中世に風穴を開け、ルネッサンスとその後の合理的自然観の形成に大きな影響を与えた、とされる。そうした重要性を持つ古代の書である。

注10 「無原罪の御宿り」とは、聖母マリアが、神の恵みの特別なはからいによって、原罪の汚れと咎とを、アンナの胎内に宿ったその存在の始めから、一切受けていなかった、とするカトリック教会における教義。

注11 一八三二年二月十四、十五日の事件。正統王朝派が、亡きペリー・ベリ公（シャルル十世 Charles X の子。ボナパルティストに暗殺された皇太子）のためのミサを挙行中、教会が民衆に襲撃され、掠奪を受けた事件。

ペリー公暗殺（一八二〇年二月一四日）から十一年目に当たるこの日、パリのサン＝ジェルマン＝ロクセルロワ教会（ルーヴル宮に隣接する教会）で、正統王朝派がペリー公追悼の大ミサを行っていたとき、民衆が乱入し、教会は掠奪を受けた。この日は丁度復活祭の灰の火曜日 *Mardi Gras* に当たり、異様な化粧をした、あるいは仮面を被った民衆が、カーニバルに浮かれ騒ぎながら、ブルボン家のためのミサの行われている教会を取り巻き、まず石を投げ、次に中に乱入しようとしたという。しかし、これには成功せず、彼等は一旦は教会から引き上げる。だが、まもなく再び戻って来ると、こんどは侵入に成功し、内部のものをことごとく破壊した。騒擾はこれだけでは収まらず、掠奪した祭典用僧衣などを着た民衆は、このミサを挙行し、それゆえに代表的な正統王朝派と見なされたバリ大司教に対しても、その館を襲い、二日間に渡って掠奪を行った。この事件は、旧い貴族階級の権威が完全に失墜し、彼等の政治力が終焉を迎えたことを象徴するものとされている。

注12 プレイアッド版の注によれば、この人物は、スールト *Nicolas-Jean de Dieu Soult* (1769-1851) を指しているという。スールトは、ナポレオン麾下の將軍で、百日天下においても參謀を務めたが、王政復古になると敬虔なカトリック教徒を演出して権力にすり寄ったという。ところが、七月革命では、革命側に与してルイ＝フィリップ政権下で重要政治家となることに成功し、首相にまで上り詰め、ついには大元帥の位を手にするに至った。それをあてこすっているという。

注13 採光のために、隣接する家側の壁に開けられた窓を「ジュール・ド・フランス *Jour de souffrance*（苦しみの光）」という。

注14 ルクルス (*Lucullus*, BC.117~BC.56) は、ローマ共和政末期の政治家。スラ配下の將軍として小アジアでの戦役で功績を

注15

あげたのち、紀元前七四年に執政官となる。その8年後政界から引退して、学問・芸術の愛好家として、また当代きつての大金持ちとして、豪華な生活を送った。

フィロポイメン Philopomen は、紀元前三〜二世紀頃のギリシヤの將軍で、スパルタを破り、アカイア同盟を主導した人物として有名である。彼は飾らない性格で、ある日、宿泊先の宿で、たまたま薪を切る手伝いをしたが、宿の主人には、彼こそがその日の賓客だとわからなかった、という逸話が残っている。